**ゴミ収集所における烏被害の対策**

相澤 裕介（○○大学）

Yusuke Aizawa（○○University）

**1.背景**

　ゴミ収集の細分化が進んだ現在では、可燃ゴミの収集に半透明のポリ袋が使用されるケースが多くなっている。これに伴い、収集所に廃棄されたゴミを烏が荒らす被害が増加している。収集所の近辺にゴミが散乱している光景は、都市の景観を乱すだけでなく、ゴミ収集の効率を悪化させている。衛生的な側面から見てもデメリットは大きい。

　この対応策として、烏除けネットの設置、ボックス型のゴミステーションの設置などが行われているが、ゴミ収集の効率化や費用的な側面で悪影響を与えていることは否めない。

　烏除けネットは、手軽に導入できるのが利点である。ただし、ごみ全体を覆うように設置しなければならないため、住人全員が適切に利用していないと効果を発揮しない。また、ゴミ収集時にはネットを避ける作業が必要となり、ゴミ収集の効率化を低下させている。

　ボックス型のゴミステーションは、一般的に数万円から十数万円の価格で販売されているため、導入時に相応の費用を要する。さらに、ゴミステーションを常時設置できるだけの敷地があることが必須条件となる。このため、全てのゴミ収集所に適用できる対策法とはならない。

**2.本研究の狙い**

　ゴミ袋の種類ならびにゴミ収集所の環境を改善することにより、烏によるゴミ散乱の被害がどのように変化するかを確認する。また、その費用対効果について検証し、実社会で実現可能な対策方法を探るための資料とする。

**3.烏の習性について**

　烏は雑食で穀物の種や果実、虫などを主食にしている。市街地などの都市部でゴミ散乱の被害を及ぼしているのは主にハシブトカラスという種類の烏であり、口ばしが太いのが特徴である。

　一般的に、鳥類は網膜の視細胞が優れており、その視力は人間より高いと考えられている。烏もこの類に漏れず、視力は相当に高い。また、鳥目という言葉とは裏腹に、明け方や夜間でも烏の目は十分に機能している。よって、ゴミの収集時間を工夫しても、烏対策という点においては根本的な解決策にならない。

　一方、烏の嗅覚はほとんど発達しておらず、餌となる生ゴミの発見は視覚のみを頼りとしている。このため、ゴミ袋や収集所に視覚的な工夫を施すことが、烏被害に対する直接的なアプローチとなる。

**4.ゴミ袋の色と被害状況**

　烏は網膜の視細胞が発達しており、人間よりも明確に色を識別できると報告されている。そこでゴミ袋の色が与える影響について実験を試みた。

　本実験では、赤色、青色、緑色、黄色、黒色、白色、透明の7色のゴミ袋を用意し、それぞれに烏の餌となる残飯を混入させた状態でゴミ収集所に放置した。いずれのゴミ袋も、残飯の種類、量は同じで、ゴミ袋の外部から透けて見える位置に残飯を配置してある。

　これらの7色のゴミ袋を1セットとし、横1列に並べて2時間放置する実験を、同時刻に5ヵ所のゴミ収集所で行った。同条件の実験を日時を改めて合計6回行ったため、都合30サンプルの実験結果を得られたことになる。実験の日時ならびに天候、気温は表1-1に示したとおりである。